

神宮に祈られる大御心

く伊勢神宮に関する御製を読むく

敬天塾 平井仁子

一、本年 宮中歌会始

御製

てんくう みようじょうなが あら とし へいあんいの
天空にかがやく明星眺めつつ新たなる年の平安祈る

召人 ピーター・J・マクミランさん

みそまやま あめ そまびと こえ いっぱんね
御杣山明るむ天に杣人の声ひびきたり「一本寝るぞ」

二、神宮と本居宣長

もも きぐざ あまてら ひ おおかみ めぐ
たなつもの百の本草も天照す日の大神の恵みえてこそ
訳：食べ物となるあらゆる本草も、天照大御神の恵みのおかげですよ。

あさよい もの とようけ かみ めぐ おも よ ひと
朝宵に物くふごとに豊受の神の恵みを思へ世の人

訳：朝も晩も、ご飯を食べる度に、豊受大神の恵に感謝しましょうよ。みなさん。

三、鎌倉時代の御製

第八十二代 後鳥羽天皇 『歴代天皇の御製集』百四十四頁

神祇（建仁元年——一二〇一）

みもすそやたのみをかくる神風の心にふかぬときのまぞなき

（内宮御百首）

訳：五十鈴川よ。（私が）頼りにしている「川拂り所になっている」神風が
心に吹かない時はありません。

ひさかたの空ゆくかぜに雲きえてつきかげさむし宮河のあき

(外宮御百首)

訳：空を吹き渡る風によって雲が消え、月の光が寒々しい。宮川の秋。

第九十代 龜山天皇 『歴代天皇の御製集』百六十四頁

雑(弘安元年―一二七八)

☆世のために身をば惜しまぬ心ともあらぶる神は照し見るらむ

てら

(弘安御百首)

訳：私が世のためならばこの身を捨てても惜しいとは思わない決心であることを、

この国の守護神である神々はきつと照らし見てくださるだろう。

訳うた：侵略を防ぐためなら惜しくない。その決心を 神も見ている。

※以下、☆マークは『歴代天皇の御製集』にも掲載されている御製です。

第九十二代 伏見天皇 『歴代天皇の御製集』百六十八頁

河月といへるころを

五十鈴川絶えぬ流れの底きよみ神代かはらず澄める月かげ

(続千載和歌集)

訳：五十鈴川の絶えない流れは川底(までも)が清らかなので、

神代から変わらずに澄み渡る月光(が映っている)。

第九十五代 花園天皇 『歴代天皇の御製集』百七十四頁

神祇を

神風にみだれしちりもをさまりぬ天照らす日のあきらけき世は

(風雅集)

訳：神風(「天の助け」)によって、世を乱していた騒乱(塵)も鎮まった。

天照大御神が照らし出す日の光のように明るく清らかな世の中であることよ。

かいたいのしよ
『誠太子書』

たいしハてうジテ みやびとの てニ いまだ しラ たみのきふヲ
太子長 二 於宮人之手一、 未 レ 知 二 民之急一。

訳：皇太子は宮中の人たちの手によって（優しく育てられて）成長し（たので）、
いまだ民衆の（生活の）切実な苦しみをわかっていない。

つねニ きテ きらノふくしよくヲ なシ おもフコト しよくはうのらうえきヲ
常 衣 二 綺羅服飾一、 無 レ 思 二 織紡之勞役一。

訳：常に綺麗な衣服を着ているけれども、
（それを作るための）糸を紡ぎ、布を織ることの苦勞を思うこともない。

とこしなへニあキテ たうりやうの ちんぜんニ いまだ べんぜズ かしよくの かんなんヲ
鎮 飽 二 稻梁之珍膳一、 未 レ 辨 二 稼穡之艱難一。

訳：いつも贅沢な食事をお腹いっぱいに食しているけれども、
いまだ（それを作るための）種植えや刈り取りの苦勞を理解してもいない。

オイテ くにニかつてなく せきすんの こう オイテ たみニあニあラン がうりの めぐミ や
於 レ 國 曾 無 二 尺寸之功一、 於 レ 民 豈有 二 毫釐之惠一乎。

訳：国に対しては、いまだに少しも功績が無く、
民に対しては、わずかな恩恵も与えられただろうか（いや、与えていない）。

ただもつて いフヲ せんくわうの よれつと みだリニほつス きセント ばんきの じゅうにんヲ
只以 レ 謂 二 先皇之餘烈一、 猥 欲 レ 期 二 萬機之重任一。

訳：ただ先帝の残した威光というもののおかげで、
道理を曲げて天皇の重い地位に上ろうとしている。

なクシテ とく あやまつてたくシ わうこうの うへニ
無 レ 德而謬 託 二 王侯之上一、
なクシテ こう いやシクモのぞム しよみんの かんニ
無 レ 功而苟 莅 二 庶民之間一。

訳：徳もないのに、誤って、貴族達の上という（高い）地位に身を置き、
功績もないのに、分不相応にも、庶民の上に君臨している。

豈不あにぎらん二自みづから 慙はぢ一乎。や（中略）

訳：自分で恥ずかしく思わないことがあるうか。

故思ゆゑにおもヒテ 而學まなビ、々まなビテ 而思おもヒ、

訳：よって、（自ら）思索した上で学び、学んだ後にはまた深く思索し、

精通せいとうし 二經書けいしよ一、

訳：聖賢の經典に精通して、

日省ひにかへりミバ 二吾躬わガ みヲ一、

訳：毎日自分自身の振る舞いを省みるならば、

則すなはチあらん 有ところ 所にル 似矣。

訳：（ようやく理想とする君主の姿に）近づくことがあるだろう。

四、室町時代（南北朝～応仁の乱）の御製

第百代 後小松天皇 『歴代天皇の御製集』百九十八頁

社頭祝言

☆日とてらし土うちととかためてこの國を内外の神のまもるひさしさ

（後小松院御百首）

訳：この日本は、伊勢神宮の天照大御神が日を照らし給い、豊受大神が五穀を始め

地上の暮らしを固め給い、いく久しくお守りになってきた国であることよ。

訳うた：日を照らし 五穀実らせ この国を 神宮の神 久しく守る。

伊勢（享徳元年―一四五二）

さらに今つくる内外の宮うちとばしらすうくなる代々にたちや帰らむ

（後花園天皇御製和歌集）

訳：この度また（新たに）造営される内宮・外宮の宮柱よ。

（この宮柱のように）真つ直ぐで正しい時代に、（世の中は）立ち返ってくれるだろうか。

賜ツニ足利義政ニ一

残民争ざんみんあらそヒテ 採首陽薇とルしゆやうノビ

訳：生き残った民は、飢えを凌ぐためにまるで首陽山で餓死した伯夷・叔齊はくい しゅくせいのように、野草を争って採っている。

處處開しよしよひらキテ 爐ろヲ 鎖とぎス 二竹扉ちくひヲ
レ

訳：（一方で將軍の館では）至る所で茶の湯の炉を開き、竹の門を閉ざして（世間を遮断し）優雅に過すごしている。

詩興しきやう 吟酸ぎんさんタリ 春二月はるにがつ

訳：私の詩作の興も、この春二月の寒々しい景色の中で苦しく、酸い（つらい）ものとなる。

満城まんじやうノこうりよく 紅緑ためニカ 爲たガこユル
レ 誰肥

訳：都中に咲き誇る花（紅）と生い茂る葉（緑）は、一体誰のためにこれほど美しく（肥えて）咲いているのか。（民が飢えているというのに、この贅沢な美しさは誰のためのものか。）

※二句目（處處）は別の解釈もあるようですが、

『明治文学全集』の解説を活かした解釈にしました。

第百三代 後土御門天皇 『歷代天皇の御製集』二百八頁

伊勢（明応四年―一四九五）

☆にごりゆく世を思ふにも五十鈴川すまばと神をなほたのむかな

（御土御門院御集拾遺）

訳：濁ってゆく世の中を思うにつけても、五十鈴川の水のように、

濁りを取り払って世を清めて戴ければと、なお一層伊勢の神に頼むことだ。

訳うた：世の濁り 清めてほしい 天照よ 五十鈴の川の ように明るく

祝（明応八年―一四九九）

☆神代よりいまにたえせず伝へおく三種みくさのたからまもらざらめや

（御土御門院五十首和歌）

訳：神代から今の時代に絶えることなく代々受け継いでいる三種の神器を

守らないでいられようか。

訳うた：神代から 絶えず今へと 受け継いだ 三種の神器を 必ず守る

五、戦国時代の御製

第百五代 後奈良天皇 『歴代天皇の御製集』二百十頁

神祇（大永元年―一五二一）

宮柱朽ちぬちかひをたておきて末の世までのあとをたれけむ

（後奈良院御製集）

訳：神宮の柱は朽ちさせない（で二十年ごとに建て替える）という誓いを定め置いて、
未来の世代まで手本（となる制度を残したの）は、どなたであつたのだろうか。

神祇（亨禄三年―一五三〇）

☆いそのかみふるき茅萱の宮柱たてかふる世に逢はざらめやは

（後奈良院御製集）

訳：屋根も古くなった神宮を式年遷宮できる時代が、来ないはずはない。

今茲 天下大疫 万民多 阸ニ於死亡一。

訳：今年、天下に疫病が大いに流行し、万民がたくさん、死に瀕している。

朕為 二民父母一、徳不レ能レ覆、甚 自痛焉。

訳：私は民の父母として、徳を行き渡らせることが出来ず、たいへん心を痛めている。

窃 写 二般若心経一卷於金字一、（中略）

訳：密かに般若心経を金字で写した。（略）

庶幾 瘡為 二疾病之妙薬一。

訳：どうか、これが疫病の妙薬となることを願う。

(参考)『後奈良院御撰何會』
ぎよせん なぞ

①上は上にあり下は下にあり 答え：ト(うらない)

②上をみれば下にあり下をみれば上にあり、母の腹を通りて子のかたにあり

答え：一(いち)